

社会科学基礎論研究会 第14回合評会

コメント「信仰」という経験の意味をどのように分析・記述するのか？

大谷栄一（南山宗教文化研究所）

- 対象論文—塚田穂高「『2世信者』の信仰形成の過程と教団外他者」（川又・寺田・武井編『ライフヒストリーの宗教社会学—紡がれる信仰と人生』第3章、ハーベスト社、2006年）

1 評者から見た本論集の位置づけ

- ・ 評者の専門：宗教社会学（とくに宗教運動論）。
- ・ 大谷・川又・菊池編『構築される信念—宗教社会学のアクチュアリティを求めて』（ハーベスト社、2000年）における第1章の発展形。
- ・ 「信者研究のアクチュアリティ」「宗教集団研究のアクチュアリティ」「『宗教と社会』研究のアクチュアリティ」の3部構成。1部は、自分史、ライフヒストリー研究（川又俊則）と自己物語論的アプローチ（菊池裕生）。
- ・ 現代日本の宗教社会学の質的变化として、言語論的転回以降の「構築主義的言説・社会分析」の登場による2つの研究課題〔櫻井 2005〕。

「一つは、入信・回心という信者の精神史的事実が回心の物語の中で常に創造され、更新されているという認識である。これによって、入信動機や入信の背景を信者のライフヒストリーから研究者が探るといった従来の「事実発見型」調査研究は意義を失った。要するに、聞き取り調査で得られるデータは信仰形成の自己物語であり、それは何度もバージョンアップする可能性がある。しかも、信仰者の内面的世界は、バージョン1やバージョン2といった自己物語からしか描きようがない。」→真如苑研究（秋葉裕・川端亮、芳賀学・菊池の研究）

- ・ 「もう一つは、自己物語が構築される社会的文脈（教団の教化戦略、教団と社会との緊張関係）の研究である。」→現代のカルト問題（櫻井の研究）。
- ・ ライフヒストリー研究によって、どのように信者個人の「信仰」という経験の意味を分析・記述するのか？ 塚田論文において、「2世信者」の信仰形成はどのように分析・記述されたのか？

2 塚田論文の概要

(1) 本論の課題

- ・ 「2世信者」の定義。①両親が同じ宗教の信者であり、②自発的な動機を持たずにメンバーシップを獲得し、③家庭内で信仰に基づいた教育的影響を幼少期から受けている信者。〔82〕
- ・ 「信仰形成の過程における当事者の主観的な意味づけを主題化するため」「インテンシヴなライフヒストリー・アプローチを採用して、「その語りの分析から、『2世信者』の信仰形成の問題を考察する」ことが目的。
- ・ 本論は広い意味での入信・回心研究。

- ・ 「2世信者」に関する先行研究では、「信仰持続を阻害する要因と、教団外他者との相互行為への目配りが不十分であった」[83]。→信仰持続の成功例と教団内他者に注目した研究。

↓

- ・ 「『2世信者』がどのように教団内世界と教団外世界を生き、親から教えられた教えに向きあって信仰を形成していったのかを、教団の教え・組織と関連づけて明らかにすること」が「本論の課題」[85-86]

(2) 事例の分析

- ・ 対象教団 Zは、「おきよめ」の手かざし儀礼を中心的な実践とする<霊=術>系新宗教の一教団。
- ・ 対象者は20代の女性Aさんで、2003年4月から翌年6月まで、10数回20時間強にわたってインタビュー。
- ・ Aさんのライフヒストリーにおける「信仰形成の4段階」[86]
 - ①幼少期～高校世期（2世信者として実践してきたが、教団外世界観を参照し、教団外他者との相互行為を経て、徐々に教えに窮屈感・束縛感を持ち葛藤を抱えるようになった）
 - ②解放感・満足感を得た時期（親元を離れ、教えの上では「悪いこと」をし、教団外他者との相互行為を通して葛藤を解決）
 - ③再び葛藤を抱えるようになった時期（教団とのつながりを感じ、自らの言動の「誤り」を感じ始め、教団外他者との齟齬を実感）
 - ④カムバックした時期（様々な事件や事故を経て、自己反省し、葛藤を解決して、教団の活動に復帰）

(3) 本論の結論

- ・ 「ライフヒストリー・アプローチを用いることで、ある「2世信者」の「ねぼけ」と「めざめ」という信仰形成の過程を明示することができた。」[96]
- ↓
- ・ 「Aさんの信仰形成の過程とは、二度にわたる教団内／教団外世間間の葛藤の生成とその解決の過程であった。それぞれは『ねぼけ』と『めざめ』にあたる。そして全体としては、『信仰を捉えなおす契機』が必要だったことがいえよう。」[97]
- ・ 一度目の葛藤。①幼少期からの親のしつけ、②タブーが多い教団の教え、③教団内（家庭）と教団外との齟齬、④横のつながりを提供できない教団の構造→親元を離れ、教えを守らず、実践を行わず、教団外集団において共同性を構築することで解決。
- ・ 二度目の葛藤。①「戒告」や教団内世界観が獲得されていたこと、②教えと自らの言動の齟齬、③自らと教団外他者の世界観の齟齬。→「おきよめ」の効果の実感と環境（家族の意味）の変化によって解決。

3 評者のコメント

- ・ 日本の新宗教研究の先行研究を十分に踏まえ、また、そこから導き出した課題をライフヒストリー・アプローチによって、クリアに分析した手堅い好論文。
- ・ 新たな世代の新宗教研究（現在の新宗教研究は「ねぼけ」の時期?）。
- ・ 以下、気になった点と筆者に問うてみたい論点。

① 意味の面での「ねぼけ」と行為の面での「目ざめ」について (83 頁)。

- ・ 意味と行為を分けることは適切か？
- ・ 行為 (宗教実践) は、belief (概念化された信念体系) と practice (非言語的な慣習行為) に大別できるが [磯前 2003: 35]、ここでの行為は明らかに後者の practice であり、「目ざめ」ではないのではないか？

② 「自己反省システム」について (93 頁)。

- ・ A・ギデンズの自己再帰性との異同は？ 自己の再帰性が近代人の特徴であれば、宗教的な自己反省性 (再帰性) というべきものがあるのか？ 「信者」(宗教者) の思考的特性という人間類型の問題。

③ 「信仰」の分析・記述について

- ・ 西山茂 [1973] の研究テーマは、「宗教的信念体系 (人間のかかえるさまざまな問題の究極的な解決を約束する信念と実践の大系) の受容」 [1]。
- ・ それは、「たんなる教団のメンバーシップの取得を意味する『入会』とは必ずしも同義ではなく、信仰をもつにいたること、すなわち『入信』を意味する」 [2]。
- ・ その指標として、「教団に対する諸種の宗教的コミットメントの観察という操作で間接的に確認」 [2]。宗教的コミットメントとして、イデオロギー的・実践的・知的・感情的次元 [10]。
- ・ 質問紙調査のデータを踏まえて、「ねぼけ」「目ざめ」概念による「信仰の螺旋的な深化過程」 [47] を分析・記述。量的な実証主義的方法による分析・記述。
- ・ それに対する塚田論文の質的なライフヒストリー・アプローチによる記述・分析。「信仰」の形成とは何か？ 「彼らが主体的に信者としての自覚を持ち、その信仰を活性化させていく」という規定で十分かどうか？ この問題は、川又氏の「信仰グラデーション」概念にも関係する。

④ 語りの問題について

- ・ 近年の日本における回心研究として、伊藤雅之 [2003]、杉山幸子 [2004]、徳田幸雄 [2005]。
- ・ 徳田によれば、回心研究は回心の「過程」に関する研究と、回心の「構造」に関する研究に大別され、前者は心理的原因に着目する心理学的過程モデルと、社会的原因に着目する社会学的過程モデルに分かれる [徳田 2005: 21]。
- ・ 徳田によれば、ロフランド・スターク・モデルは「社会学的回心研究の起点」となった研究であり、「回心者と宗教集団の信者との相互作用を考慮に入れた」。その後、個の能動性を組み入れた役割モデル、宗教集団や社会的コンテクストによる影響を重視したのが社会化モデル [64]。
- ・ また、1970年代の B・テイラーや J・A・ベックフォードによる「語り」への注目 [82]。
- ・ ここで、冒頭の櫻井の指摘に戻る。筆者による「語りの分析」 [82] は、(櫻井のいう) 信仰形成の自己物語なのか、信仰形成のライフヒストリーなのか (→終章における「ライフヒストリー」と「ライフストーリー」問題へ)。
- ・ 筆者の立場は、信仰形成のライフヒストリーだと思うが、では、そうした場合、渡辺雅子や磯岡哲也らの宗教社会学ライフヒストリー研究第一世代 (と名づけておく) と、筆者たちの立場の違いはあるのかどうか。
- ・ ライフヒストリー・アプローチを、「問うという関わり方を通して産みだされた経験の意味を如何に汲み上げ、どのような現実として切り拓いて見せるかという、経験に対する表現力、社会学的構想力」 (終章、182 頁) の問題として考えた場合、自己物語論的アプローチや、先行世代のライ

フヒストリー・アプローチに対する本論集執筆者たちの立場性の違い(その方法的特徴)を今後、どのように呈示しうるのか、その展望をお聞きしたい。

【参考文献】

- 磯前順一 2003 『近代日本の宗教言説とその系譜——宗教・国家・神道』 岩波書店
- 伊藤雅之 2003 『現代社会とスピリチュアリティ——現代人の宗教意識の社会学的研究』 溪水社
- 西山茂 1976 「宗教的信念体系の受容とその影響——山形県湯野浜地区妙智会員の事例」(『東京教育大学文学部紀要』 23号、1-73頁。
- 櫻井義秀 2005 「現代日本の宗教社会学における調査研究の動向」(韓日宗教フォーラム第三回学術大会『宗教と儀礼』 韓神大学、pp.123-141、同ハングル訳 pp.114-129)
- <http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~n16260/pdf2005/koreaforumshinnyoen050705.pdf>
- 杉山幸子 2004 『新宗教とアイデンティティ——回心と癒しの宗教社会心理学』 新曜社
- 徳田幸雄 2005 『宗教学的回心——新島襄・清沢満之・内村鑑三・高山樗牛』 未来社